

学 位 論 文 審 査 要 旨      公開審査日 2022 年 1 月 26 日 (水)

報告番号： <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">甲</span> ・乙      第 2210 号		氏名：      田子 友哉	
論文審査 担 当 者	主査      教授      河合 隆      印	副査      教授      齋藤 和博      印	
		副査      教授      河地 茂之      印	
<p><b>審査論文の題目：</b>    Significance of Radiofrequency Ablation for Unresectable Colorectal Cancer With Liver Metastases</p> <p style="text-align: center;">(切除不能大腸癌肝転移に対する RFA の意義)</p> <p><b>著 者：</b>    Tomoya Tago, Kenji Katsumata, Ryutaro Udou, Kenta Kasahara, Junichi Mazaki, Hiroshi Kuwabara, Masanobu Enomoto, Tetsuo Ishizaki, Yuichi Nagakawa, Katsutoshi Sugimoto, Takao Itoi, Akihiko Tsuchida</p> <p><b>掲載誌：</b>    Anticancer Research 41:5539-5547 (2021)</p>			
<p><b>論文要旨：</b></p> <p>大腸癌において肝転移は予後規定因子である。本研究は、大腸癌肝転移に対するラジオ波焼灼療法 (RFA) を含む集学的治療の意義について明らかとすることを目的とした。2001 年から 2021 年の間に大腸癌肝転移に対して治療を受けた 147 人を対象とし、RFA 群 (n=26)、切除群 (n=92)、化学療法群 (n=29) の 3 群に分類し臨床腫瘍学的因子および予後について解析した。主要評価項目は全生存期間とした。根治切除不能な RFA 治療を含む集学的治療を受けた RFA 群、化学療法群は切除あるいは手術不能症例であり、切除群は根治切除可能症例である。臨床腫瘍学的因子より、病勢の進行は化学療法群、RFA 群、切除群の順であった。全生存期間中央値は、RFA 群で 44.9 か月、切除群で 49.5 か月、化学療法群で 11.6 か月であり、5 年生存率はそれぞれ 34.6%、42.4%、6.9%であった。Log-rank 検定より全生存期間は切除群&gt;RFA 群(p=0.027)、RFA 群&gt;化学療法群(p=0.003)であった。本研究の結果は、RFA 群の生存成績が切除群に匹敵し許容しうることを示した。手術のみでは根治不能な症例に対する補完的な RFA の適応が予後規定因子となっている肝転移病変を RFA にて局所制御することが予後延長に寄与したと考えられた。RFA は低侵襲で、汎用性の高い治療法である。切除不能あるいは手術不能大腸癌肝転移の治療において、今後エビデンスの蓄積が得られれば根治あるいは長期予後を得るための集学的治療の重要な一端を担う可能性を有することが示唆された。</p> <p><b>審査過程：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1、研究の意義や現状に関した明瞭で適切な説明がなされた。</li> <li>2、本研究に用いた検査方法に関して質問がなされ、的確な回答が得られた。</li> <li>3、結果ならびにその解釈について質問がなされ、明瞭な説明がなされた。</li> <li>4、臨床背景について質問がなされ、的確な回答が得られた。</li> <li>5、今回の結果を踏まえた今後の研究や応用について質問がなされ、適切な回答が得られた。</li> </ol> <p><b>価値判定：</b></p> <p>大腸癌は、がん死の 2 位であり、女性では 1 位となり問題となっている。大腸癌において肝転移は予後規定因子であり、肝転移は全大腸癌患者の 30%で発症し、大腸癌死因の 3 分の 2 を占める。RFA にて局所制御することが予後延長に寄与したと考えられた。RFA は低侵襲であり、汎用性の高い治療法である。根治切除不能大腸癌肝転移の治療において、今後長期予後を得るための集学的治療の重要な一端を担う可能性があることを証明できた。臨床上重要であり、学位としての価値を認める。</p>			